千種切『後拾遺和歌集』補考

――本文と朱合点――

舟見一哉

本稿では、拙稿［二〇一六］以降に見出した一葉を紹介しつつ、これまで具体的に論じられなかった千種切の本文の性格と、朱筆で書き込まれた合点について、検討を加えることにする。

一、本稿の目的

『後拾遺和歌集』（以下、和歌集名は略称を用いる）の伝本は、清輔本や定家本が残っていないため、三代集の伝本のように定家本／非定家本といった区分で整理ができず、写本の伝播を把握し難い。清書・奏覧・再奏という成立過程の問題も相まって、各写本の性格も判然としない点を残す。かかる状況を改善すべく、拙稿［二〇一四］では、日野俊光を伝称筆者とする『後拾遺集』の断簡〈千種切〉から、定家本の本文と勘物、および清輔本の勘物を再建し、伝本分類の基準とする案を示した。そして、拙稿［二〇一六］にて、筆跡に関する私見の一部を修正し、千種切から定家本の本文を再建しうることを補強した。

二、本文について

拙稿［二〇一四］と拙稿［二〇一六］では、（1）千種切に清輔本と定家本の勘物が転記されていると考えられること、（2）千種切の筆跡が、実践女子大学図書館山岸文庫蔵『拾遺集』（巻十までの零本）のうち、寂恵が「他筆」に書写させた巻三から巻九と酷似していること、以上二点から、千種切は寂恵がその作成に関わった写本であると考

えた。そして、千種切が寂恵の関わった〈寂恵関与本＝寂恵と他筆による分担書写本や寂恵の令写本〉であるならば、奥書から〈寂恵関与本〉であることが分かっている『古今集』や『拾遺集』、『詞花集』の親本は定家本であるから、千種切の本文も定家本系統であると類推できると考えた。

千種切の本文が定家本系統であろうと主張するためには、定家の所持していた『後拾遺集』本文との比較が必要であるが、比較できる歌が少ないため、拙稿では具体的な例示を省略していた。ここに改めて、定家の所持していた『後拾遺集』の本文を伝える可能性のある『五代簡要』と『定家八代抄』を用いて千種切の本文の性格を検討する。この手法は、浅田［一九九七］、後藤［一九九八］に倣うものである。

対象とする歌は、千種切として和歌本文が一部でも伝わる四一首である（新出断簡所収歌を含む）。四一首のうち、『五代簡要』とは十首、『定家八代抄』の初撰本とは二首、再撰本とは三首（そのうち二首は初撰本所収歌と同）が比較できる。『定家八代抄』の三首はすべて『五代簡要』所収歌でもあるため、計十首が比較対象となる。新出断簡によって、比較できる歌が二首増えはしたが、それでも十首と少ない。以下、定家資料群とともに、後藤［一九七三］を参考にして『後拾遺集』の写本のうち注意すべき写本とともに比較する。異同の有無や性格によって私にA・B・Cと整理しつつ示す。依拠資料は以下の通り。

［定家資料群］

・**定家加筆『五代簡要』＝時**（『冷泉家時雨亭叢書37』朝日新聞社、一九九六）

・**志香須賀文庫蔵『万物部類倭歌抄』＝志**（▽右の時雨亭文庫蔵本を祖本とする写本。『日本歌学大系　別巻三』風間書房、一九六四）

・**初撰本『定家八代抄』**…『定家八代抄と研究』（樋口芳麻呂編著、未刊国文資料刊行会、一九五六・一九五七）

・**再撰本『定家八代抄』**…大東急記念文庫蔵本（『大東急記念文庫善本叢刊　中古中世篇　和歌Ⅳ』汲古書院、二〇〇五）

［『後拾遺集』諸本］

・**冷**＝冷泉家時雨亭文庫蔵為家相伝本（『冷泉家時雨亭叢書4』朝日新聞社、一九九八）

・**陽**＝陽明文庫蔵伝為家筆零本（▽巻十までの零本ながら詳細な勘物を有する。『陽明叢書　国書篇　第二輯』思文閣出版、一九七七）

・**国**＝国学院大学図書館蔵伝為世筆零本（▽巻十までの零

本ながら詳細な勘物を有する。國學院大學デジタルミュージアムの画像による）

・**書a**＝宮内庁書陵部蔵八代集本［五一〇・一一］（▽いわゆる家本奥書を有する。国文学研究資料館・新日本古典籍総合データベース）

・**書b**＝宮内庁書陵部蔵八代集本［五一〇・一〇］（▽いわゆる順徳院本奥書を有する。国文学研究資料館・新日本古典籍総合データベース）

※なお、蓮華王院宝蔵通俊自筆本によって書写したという奥書をもつ太山寺蔵本は、奥書によると巻第六から十五までは通俊自筆本ではなく別の本で補いつつ写したものであり、現存する千種切はその補写巻にあたる部分しか確認できないので、比較対象とはしない。

A　定家資料群と異同あり

巻第十・五九二

◉『五代簡要』第二・五句に異同

・第二句

千「衛士のたくひの」

時「ゑしのきく火の」

志「ゑじのたく火の」

・第五句

千「君そかなしき」

時「君そこひしき」

志「きみそ恋〔かな〕しき」

※傍記は〔　〕で示す。以下同。

◎後拾遺集諸本

・第二句　千「衛士のたくひの」―冷「□しのたくひの」（「□」に双点ミセケチ「ゑ」）―書b「ゑしかたく火の」

・第五句　千「君そかなしき」―国「きみか〔そ〕かなしさ〔きイ〕」

・詞書①千「まい〔カイ〕り侍けるに道に」―冷陽「まいりはへりけるみちに」―国「まか〔いイ〕り侍けるに」―書a書b「まかり侍りけるみちに」、詞書②千「すくとて」―書a「すゝめて」、詞書③千「侍けれは」―冷陽国書b「みはへりけれは」―書a「みけれは」

▼第二句、時雨亭文庫蔵『五代簡要』に独自本文があるが、影印本では「きく」の部分に墨汚れがあり、右傍に文字があるようにもみえる。第五句、『後拾遺集』諸本の異同をみても『五代簡要』の独自本文であり、千種切とは一致しない（後述）。

巻第十・五四九

◉『五代簡要』第三句に異同

千「つゆけきを」
時「つゆけきを」
志「つゆけきを〔に両〕」

◎後拾遺集諸本

・第二句　千「つゆけきを」―冷「つゆけきに（「に」単点ミセケチ「を」）」―書a「露けきに」

▼志香須賀文庫蔵本に傍記があるが、本行本文は千種切と同じ。その祖本にあたる時雨亭文庫蔵に傍記はない。

巻第七・四四七

◉『五代簡要』第四・五句に異同

千「こまつかわらにたつやむれゐる」
時「こまつかはらにたつやむれゐる」
志「こまつかはらにたつやむれぬる」

◎後拾遺集諸本

・第四句　千「こまつかわらに」―諸本「こまつかはらに」

・詞書①千「おさなき」―国ナシ、詞書②千「こともに」―冷「〇こともに（補入）」、詞書③千「かうふり」―国書a「かふり」、詞書④千「はかまきせなと」―国「はかまきせさせなと」―陽「はかまきなと」―書a「なと」、詞書⑤千「し侍けるに」―書a「し侍ける」、詞書⑥千「かはらけとりて」―書a「かはらけとりてよめる」

▼第四句は仮名遣いの違い。第五句は『後拾遺集』諸本に異同はなく、志香須賀文庫蔵本の誤写と推測される。

右の三例が、千種切本文と一部でも相違する例であるが、このうち問題とすべき異同は五九二の一例といえる。この一例のみをもって、千種切の本文は定家本系統か否かを判断するのは難しいのだが、『五代簡要』の成立年と、定家本三代集の校訂年との関係をふまえて考えてみる。

冷泉家時雨亭文庫蔵本の定家筆奥書によると、『五代簡要』は承元三年（一二〇九）に作成された歌学書である。承元三年という年は、定家の三代集の書写活動からすると極初期にあたる。『古今集』の場合、記録上確認できる最初の書写は承元年間であった（写本は現存せず、『拾遺愚草』二七一九詞書から知られる）。次が建保二年（一二一四）の書写（久曽神昇蔵本ほか）、そして最後が嘉禎三年（一二三七）十月二十八日である（梅沢氏旧蔵伝為世筆本）。『後撰集』の場合、年号本の初例が承久三年（一二二一）、無年号本は建保二年（一二一四）以降であったと推定されている。『拾遺集』の場合、年号本の初例は貞応元年（一二二二）であった。したがって、承元三年（一二〇九）

という『五代簡要』の執筆は定家にとって極初期の歌学活動だったのである。これは『五代簡要』所収本文の問題に直結する。定家本三代集の奥書を年代順に並べて読み比べると、貞応年間（一二二二～）以降、証本観に変化が生じており、家本を重視する態度から、自らの見解を加えた校訂を全面に出し始め、本文が変化する。この変化の契機は清輔本との接触にあると考えられる（以上のことは、浅田［一九九五］・同［一九九六］・片桐［一九九一］・同［二〇〇〇］・岸上［一九六六］・杉谷［一九七一］・西下［一九五四］・拙稿［二〇一五］・拙稿［二〇一七］などを参照されたい）。『五代簡要』がつくられた承元三年は、証本観が変わる遥か以前であるから、『五代簡要』所収の『後拾遺集』本文も、証本観が変わる以前の本文、『古今集』の例から予想すれば、二条家や冷泉家に証本として伝えられていく定家本とは異なる本文であると推測される。

以上のことから、『五代簡要』と千種切の本文が異なっていた五九二の「悲しき」「恋しき」という本文異同をもって、千種切の本文は定家本系統にあらずとは即断できないと考える。ただし、定家は晩年に至るまで『五代簡要』に加筆修正を行ったと考えられてもいる（時雨亭叢書解題ほか）。この加筆修正が、定家本勅撰集の本文変化と常に連動し、更新され続けているのであれば、千種切と比較できる範囲において加筆修正を見いだせない事実は、右の推測の反証となりうる。しかしこの点は、『五代簡要』全体の本文を、定家筆本の残る三代集と比較しなければ分からない（定家本三代集と『僻案抄』との関係を考察する舘野［二〇二一］が参考となる）。後考を俟つこととし、五九二の本文異同が、定家群資料と千種切との乖離を示す決定的な異同ではなかろうということを指摘するに留める。

B　定家資料群と異同なし・『後拾遺集』諸本と和歌本文に異同あり

巻第六・三八八

◉『五代簡要』＝千種切

◎後拾遺集諸本

・第三句　千「なくちとり」―書a「（○なく）千鳥」

・第五句　千「ものにそありける」―冷「ものにさりける（「さ」に双点ミセケチ「そあ」）」

巻第六・三八九

◉『五代簡要』＝『定家八代抄』＝千種切

◎後拾遺集諸本

・第三句　千「たつちとり」―書a「鳴千鳥」

・第四句　千「うらつたひする」―書b「うらつたひ行」

いずれも定家資料群と千種切は一致する。かつ、『後拾遺集』諸本に本文異同がある。よって、そもそも『後拾遺集』諸本に異同のない和歌が千種切として偶然残っいてるわけではない、ということが確認できる。

C　定家資料群と異同なし・『後拾遺集』諸本とも和歌本文に異同なし

巻第十・五三七

◉『五代簡要』＝千種切

◎後拾遺集諸本、異同なし

巻第八・四六五

◉『五代簡要』＝『定家八代抄』＝千種切

◎後拾遺集諸本

・詞書①千「為憲」―国「為範（「範」をミセケチして右に「憲」）」―書a「為憲か」

巻第八・四九一

◉『五代簡要』＝千種切

◎後拾遺集諸本

・詞書①千「侍れは」―書a「侍るに」

巻第八・四九二

◉『五代簡要』＝千種切

◎後拾遺集諸本

・詞書①千「いつちともなくて」―冷「いつともなくて〔「つ」右下に「こ」〕」―国「いつともなくて」―陽「いつことともなくて」―書b「いつとなくて」、詞書②千「侍れは」―書a「侍けれはよめる」

巻第十・五三六

◉『五代簡要』＝『定家八代抄』＝千種切

◎後拾遺集諸本

・詞書①千「帳の」―書b「かの帳の」、詞書②千「みつけたれは」―冷陽書a「みつけたりけれは」―国「みつけたれは〔りけイ〕」―書b「みつけたりけれは〔「り」右に「頓ナシ」〕」、詞書③千「おほしかほにて」―冷陽「おほしかほに」―国「おほしくて」、詞書④千「歌三首」―冷「うたみつ」―国「うた三」―書b「歌三」、詞書⑤千「かきつけられたりける」―陽「かきつけたりける」―国「かきつけられたる」―書a「かきつけられける」

いずれも定家資料群と千種切は一致する。『後拾遺集』諸本にも和歌本文には異同がない。なお、『定家八代抄』の詞書は、勅撰集から抄出する際に定家が適宜改変しているので、定家資料群から定家本の詞書は分からない。

以上のように、『五代簡要』じたいの問題が残りはするが、千種切が定家本系統の本文ではないとみる明証は見いだせない（注1）。このデータをもって拙稿［二〇一四］と拙稿［二〇一六］にて示した試案の補強とする。

三、朱合点の素性

千種切には、勘物の冒頭と、勘物の意味の切れ目ごとに、朱筆で書かれた合点がある。また他本注記にも朱合点がある。さらに、和歌第一句の右肩に朱合点のある歌も五首ある。この歌頭の合点について、現時点での見通しを述べておきたい（なお千種切は一首を二行書きしているため、五三四のように下句のみ伝わる歌に朱合点があったか否かは分からない）。

①巻第七・賀・四四七　いろいろに・源重之
②巻第八・別・四八四　おもひいてよ・源道済
③巻第八・別・四八七　たたぬより・源光成
④巻第八・別・四九二　いつちとも・中原頼成
⑤巻第九・羇旅・五〇六　すきかてに・藤原国行

右の五首すべてが入集している和歌集は、『新編国歌大観』の範囲では見いだせない（完本の残っていない、八代集からの抄出や秀歌撰は未調査）。『後拾遺集』の諸本にも一致する合点を持つ写本は見当たらない。

従来、『後拾遺集』に付された合点に関する情報として、神宮文庫蔵本（『古典研究會叢書別刊第三　後拾遺和歌抄正廣詠歌』汲古書院、一九七四）の巻第一巻頭の下部にある、「左点、続新撰抄歌也。右点者、合目六之間自然事也」という勘物が注目されてきた。左点すなわち「／」という形状の合点は、『続新撰（抄）』入集歌であることを示し、右点すなわち「＼」という形状の合点は、目録と見比べて付したものであったらしい。『続新撰（抄）』とは、『後拾遺集』撰者である通俊が『後拾遺集』から秀歌を選んで編纂した秀歌撰である（『袋草紙』『和歌現在書目録』『八雲御抄』）。本書は散逸しており、またこの勘物を持つ神宮文庫本にはなぜか合点がなく、所収歌についてはよくわからない（稲賀［一九六六］・上野［一九七六］）。浅田［二〇一四］は、足利義尚を伝称筆者とする一連の断簡のうち秋上までは、

にある二種類の左右合点に着目し、左合点は『続新撰（抄）』入集歌を示す合点ではないかと推定している。左点「／」という特異な形状であることや、右点と左点が同一歌に施されていることなどから、首肯すべき見解と思われる。

この伝足利義尚筆切の合点と、千種切の合点が一致すれば、千種切の合点も『続新撰（抄）』入集歌を示すといえそうなのだが、秋上までにおいて両者の現存範囲が重ならず、比較ができない。千種切の合点が『続新撰（抄）』入集歌を示す可能性は現時点では消えないが、新たな伝足利義尚筆切の出現を俟ちたいと思う。

四、新出断簡について

最後に、千種切の新出断簡（稿者蔵）を公開する。

作者「中原頼成」の下部に勘物がある。一部傷みのため読めないが、陽明文庫蔵伝為家筆本の勘物と同文とみられる。彰考館本には「前淡路守従五下、主税頭貞國子」とあるが、彰考館本の勘物には不審点が多く、『勅撰作者部類』（小川［二〇一七］参照）では「貞清」とあることなども勘案すると、千種切・陽明文庫蔵本の勘物「貞清」が正しいのでないかと判断される。なお、國學院大學図書館蔵本・神宮文庫本に勘物はない。

書き込まれている位置からすると、この作者勘物は清輔本にあった勘物と推測される。

【書誌】

縦二四・四×横一六・三糎。和歌上句の字高は約一九・二糎、詞書の字高は約一九・〇糎、和歌より一・二糎ほど下から詞書を書く。紙質は斐紙系と目される。合点はすべて朱筆。「中原頼成」の下部に勘物、本文同筆。裏面は台紙貼りのため確認できず。極札「日野殿　俊光卿／橘通貞（守村・黒）」（分家二代古筆了任極め。※裏面は台紙貼りのため確認できず）。

【翻刻】巻第八・四九一～四九二上句

※「／」はすべて朱筆合点。

橘通貞式部をわすれてみちのくに
にくたり侍けれは式部かもとにつかはし
ける

赤染衛門

ゆく人もとまるもいかにおもふらん
わかれてのちのまたのわかれを
ものいひける女のいつちともなくて

とをき所へなむいくといひ侍ければ
中原頼成
／いつちともしらぬわかれのたひなれと

《勘物》
／前淡路守　／従五下
／主税頭従四下貞清男
／母散位従［　］
［　］重親［　］

（注）

（1）四九二、五三六の例から、千種切の詞書は『後拾遺集』の諸本とは小異のあることが確認できる。なお定家資料群と比較できない歌において、千種切の独自本文も存在する。千種切では賀・四四六が次のようにある。

人のもきし侍けるによめる
すみよしのうらのはまもをむすひあけて
なきさのまつのかけをこそみめ
▽「はま」の右側に「／（朱合点）タイ」

他本では第二句「玉藻」とする。「はまも（浜藻）」でも歌意は通じるが、賀歌としては「玉藻」がより適切か。

また、哀傷・五五五には朱筆の他本注記もある。

おやなくなりて山寺に侍ける人の
もとにつかはしける
やまてらのはゝそのもみちゝりにけり
このもといかにさひしかるらん
▽「てら」の右側に「（朱筆）里イ」

【引用参考文献】

・浅田徹［一九九五］「定家本とは何か」『國文學　解釈と教材の研究』四〇―一〇
・同［一九九六］「顕註密勘の識語をめぐって」『和歌文学研究』七二
・同［一九九七］「後拾遺集為家相伝本をめぐって」『王朝和歌と史的展開』笠間書院
・同［二〇一四］「藤原通俊の続新撰について―伝足利義尚筆後拾遺集断簡の紹介」（『王朝文学の古筆切を考える』、武蔵野書院）
・稲賀敬二［一九六六］「清輔云う所の後拾遺集証本「黒本」の新資料―附・伝光明峯寺殿筆広島大学本後拾遺集翻刻」（『中世文芸』三五→『稲賀敬二コレクション　五』所収）
・上野理［一九七六］『後拾遺集前後』笠間書院
・小川剛生［二〇一七］『中世和歌史の研究』塙書房
・片桐洋一［一九九一］『古今和歌集の研究』明治書院

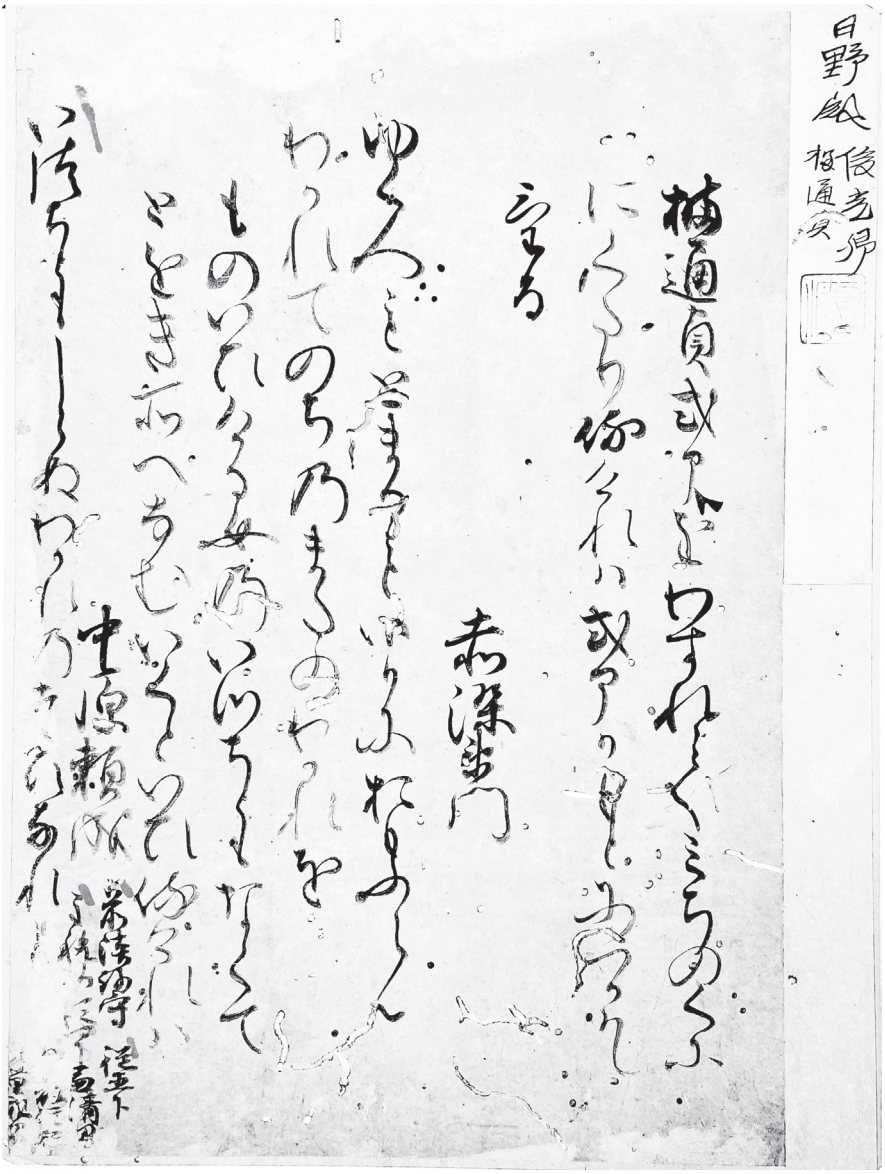
・同［二〇〇〇］『古今和歌集以後』笠間書院
・岸上慎二［一九六六］『後撰和歌集の研究と資料』新生社
・後藤祥子［一九七三］「後拾遺和歌集の伝本―その系統と性格―」『日本女子大学紀要』二二
・同［一九九八］「解題」『冷泉家時雨亭叢書　第四巻』朝日新聞社
・杉谷寿郎［一九七一］『後撰和歌集諸本の研究』笠間書院
・舘野文昭［二〇〇二］『中世「歌学知」の史的展開』花鳥社
・西下経一［一九五四］『古今集の伝本の研究』明治書院
・拙稿［二〇一四］「清輔本・定家本『後拾遺和歌集』の復元試論―陽明文庫本・千種切・寂恵本勅撰集から―」『和歌文学研究』一〇八
・拙稿［二〇一五］「清輔本『拾遺和歌集』の残痕―定家本の生成に及ぶ―」『和歌文学研究』一一〇
・拙稿［二〇一六］「寂恵の古典書写をめぐって―筆跡と本文―」『東京大学資料編纂所研究紀要』二六
・拙稿［二〇一七］「伊達本古今和歌集の性格―定家本『古今集』の本文異同について―」『日本文学研究ジャーナル』一

※なお歌番号は『新編国歌大観』（日本文学 web 図書館）による。

【付記】

本稿は日本学術振興会・科学研究費助成事業・二〇二〇年度研究活動スタート支援（研究課題番号 20K21965）に基づく研究成果の一部である。

（ふなみ　かずや・実践女子大学准教授）

【千種切現存一覧】

№.	所載資料名	歌番号
1	個人蔵手鑑『百千鳥』（『古筆学大成』1）	387和歌～389和歌
2	根津美術館蔵　四号手鑑　（大成2）	446詞書～448詞書前半
3	個人蔵手鑑『隠心帖』　（大成11）	巻第八内題・部立名・461～462上句
4	五島美術館蔵『毫戦筆陣』　（大成12）	465詞書～466詞書前半
5	個人蔵手鑑［東京大学史料編纂所蔵レクチグラフ6800-47］	483詞書後半～485詞書前半
6	イエール大学蔵『手鑑帖』（▽№5と連続）	485詞書後半～487
7	個人蔵まくり	491詞書～492上句
8	公益財団法人徳川黎明会蔵『玉海』　（大成9）	496作者～497詞書
9	梅沢記念館蔵『あけぼの』　（大成3）	504詞書～505和歌
10	京都市某家（某家4）蔵［国文学研究資料館・日本古典資料調査記録DB］	506詞書～508詞書
11	『続国文学古筆切入門』17図　（▽№10と連続）	508作者～510詞書前半
12	出光美術館蔵『見ぬ世の友』　（大成4）	534下句～535（巻第九巻軸）
13	東京国立博物館『藻塩草』　（大成5）	巻第十内題・部立名・536
14	『古筆切影印解説　Ⅱ』14図　（▽№13と連続）	537
15	三井文庫蔵『高松帖』	545作者～547和歌
16	不明　（大成・補遺45）	549作者～551詞書
17	『第三回　趣味の茶掛展目録（福山天満屋）』	554下句～556作者
18	個人蔵手鑑『旧錦嚢』　（大成6）	559詞書～560上句
19	根津美術館蔵『文彩帖』　（大成7）	570詞書後半～571上句
20	公益財団法人徳川黎明会蔵『八雲』	581詞書～582上句
21	『慶安手鑑』　（№20と連続）	582下句～583作者名
22	個人蔵手鑑　（大成8）	592詞書～593詞書
23	個人蔵手鑑　（大成10）	594下句～595詞書前半